［課程博士用　様式 3］

西田　愛

「古チベット語占い文書の研究」

- 銅銭・鴉鳴・骰子占卜文書の比較研究を中心に -

20 世紀初頭に敦煌石窟をはじめとしたシルクロードの各地から数万点に及ぶ古文書が発見された。これらは、漢語、サンスクリット語、チベット語、ウイグル語など様々な言語で記されており、アジア学にとって 20 世紀最大の発見と言える。この内、１万点近くにのぼる古チベット語文書（8-10 世紀）には、大多数を占める仏教文献以外に、手紙・契約・裁判・法律・医学・占い・寺院会計といった当時の社会状況を反映する世俗文書が多数含まれている。仏教文献の大部分がサンスクリット語からの翻訳であるのに対して、これらの世俗文書はチベット語本来の著作であり、古代チベットについての歴史資料としても言語学資料としても高い価値を持つ。

その中で、筆者の研究対象である占い文献は、骨、骰子（さいころ）、銅銭、烏（からす）の声、夢、日時による占いなど、占法や記述内容が多種多様で、当時の社会状況や民間信仰を知る上で有益な研究対象である。筆者は、これらの古チベット語占卜文書に対して網羅的な実見調査と内容読解を進めてきた。本稿は、このうちの銅銭、鴉鳴（からすの鳴き声）、骰子（さいころ）という３種類の占卜書に対するこれまでの研究をまとめたものである。また、内容の分析を進めるにあたっては、書式の解明に焦点をあててきた。というのも、古チベット語文書には手紙や契約といったジャンルにより、それぞれに特有の書式やフレーズが厳格に規定されていたことが判明してきている。その上、同ジャンルに属する文書を内容と書式的特徴に基づいて分類することにより、各文書のもつ機能を解明することができるだけではなく、文書の作成された社会背景や言語環境を見いだすことも可能であることが証明されている。従って、古チベット語占卜文書のもつ役割や、成立背景を明らかにしようという筆者の研究においても、内容と書式的特徴に基づく分類は必須であると言える。

しかし、上述のとおり、古チベット語の占卜書に記された占卜法はバリーションに富んでいて、単一の書式を想定することは難しい。そこで、本稿では、銅銭占い、鴉鳴（烏の声による）占い、骰子（さいころ）占いについて考察をおこなった。本稿の１～３の各章は、 ①全文書の概説、②翻字テキストと翻訳の提示、③書式の解明、④他言語文書との比較研究、⑤文書の成立背景、という観点から占いの種別に文書間の関係性をまとめた。最後に、それらの相違点、共通点から古代チベット社会における占いの全体像についての現段階の見解を述べた。

さて、第 1 章では、銅銭占卜に関する全チベット語文書を照査した。その結果、パリ国立図書館所蔵ペリオ蒐集チベット語文書コレクション中の１点と、大英図書館所蔵スタイン蒐集チベット語文書コレクションに属する１点が接合できることが分かった。従って、古チベット語銅銭占卜文書は、 ITJ 741、P.t.1055 + ITJ 744、P.t.1056 が属す流通本と、それ以外の２文書（ITJ 742、ITJ 1239）に大別できた。さらに、チベット語銅銭占卜文書と漢語文書との対照研究によって、両

者の間には占法と内容構成にある程度の符合はみられるものの、それぞれが独自の書式を有していることが分かった。つまり、両者には共通する祖本の存在を想定できない。しかしながら、銅銭占卜は、中国に起源を持つ占いであり、チベット語文書には漢語文書や中国文化からの影響が多分にみられることに加えて、両者は、占卜法の淵源を周易に求めるというアイデアを共有していた。その際、チベット文書では、孔子や中国の皇帝を占卜の始祖とし、漢語文書では、老子や周公がその役を担っていた。これらの占卜来歴は、事実を伝えたものであるというよりは、銅銭占卜の正当性や効果を訴えるための由緒として提示されたものである可能性が高い。しかし、そこにみられる着想の一致こそ、両文書の成立背景を傍証するものであると考えられる。 従って、古チベット語銅銭占卜文書は、漢語占卜文書や中国占術に精通した人物によって書された可能性が高いと考えられる。そして、それらの書体的特徴からは、10 世紀の文書であることが推測されるのである。 以上より、チベット語銅銭占卜文書は、中国占術を吐蕃期から伝わるチベット語占卜文書の書式に融合させた文献であり、おそらく 10 世紀の敦煌漢人社会の中で作成され、流行していた占卜書であったと考えられる。

第２章では、鴉鳴占卜文書について、チベット語文書全６点の内容を吟味した。その結果、流通本とヴァリアントと呼べる２系統に大別できることが分かった。また、第２節においては、漢語鴉鳴占卜文献との比較研究に取り組んだ。その結果、鴉鳴占卜一覧表は、チベット独自の創作であり、 やがて漢文占卜文書中にも取り入れられるようになったと考えられることがわかった。それらは、百恠圖に類する書式を持つ占卜記事とともに収録され、漢語鴉鳴占卜文書に仕立て上げられたのである。また一方で、後期仏教伝播時期のチベットでは、インドのある種の鴉鳴占卜を記した民間信仰ないし伝承に基づいた Kākajariti がチベット語に翻訳されて大蔵経に収められた。こうして、仏教にうまく合流した Kākajariti は、18 世紀のラマの手を経て現代へと継承されるに至ったのである。推測ではあるが、Kākajariti が一定の書式をもちながら他のサンスクリット本に記された鴉鳴占卜書よりも簡明な記述を採用し、時間と方位にもとづく編纂を取り入れていることには、古チベット語鴉鳴占卜一覧表の書式が影響を与えた可能性が示唆されていると考えた。

つづく第３章では、骰子占卜文書に関して、文書の構成からこれらを２系統に分類し、それぞれの書式を明らかにした。 骰子占卜文書は、チベット帝国内の広い地域で必要とされた占卜書であり、敦煌では、チベット支配期以降も作成され続けていた。古代チベットでは、骰子が諸々の争議にまでも決定力をもつ程の重要な道具であり、おそらく骰子占卜も特別な占卜法とされていたことが考えられる。そのため、骰子占卜文書には、他の占卜書にはみられない内容豊かな韻文や、様々な神格が描かれており、吉凶と強い結びつきを有する韻文や神格は、吉凶を導く、あるいはその具体像を心象風景に投影する機能を果たしていた。さらに、骰子が重要視された社会においては、骰子占卜も中央政府の管理下にあり、その規範が一定の年ごとに出されていた、という背景が想定できた。

このような詳細な検証から、同一占卜法に関する諸文書の相互関係を整理できたと言える。また、他言語文献との比較によって、文書の成立背景についても分析を進めることができた。 ３種の占卜書には書式や内容に共通性がみられるにも関わらず、その成立背景は単一ではないということがわかったのである。

また、銅銭占卜文書では「周易」や「孔子」という中国の要素に占卜の来歴を求めて、その正当性や効果を高める由緒としていた。これと同じ技巧が、チベット大蔵経に収められた Kākajariti

にも認められる。こちらは、その由縁を仏教に結びつけたのである。一方で、古チベット語の鴉鳴占卜書や骰子占卜書では、八百万の神々がその役割を担っていた。しかし、古代の（仏教国となる前の）チベットに帰属する神々の効力は、現代にまで及ぶことはなく、各要素は仏教的に読み替えられて、現代へと継承されているのである。

以上。

付）

今後は、他ジャンルの占卜書についても、同じ方法論で研究を進め、古チベット語占卜文書の全体像を解明することを今後の課題としたい。また、本稿では論証しきれなかった骰子占卜書の問題点に関しては、現代チベット文化圏に継承された占卜書を蒐集し、内容や機能、社会的役割などを調査することで、問題解決の一手段としたい。